あかつき

大方あかつき館報
上林 暁文学のふるさと
第5号
2001年7月発行

特集 上林 暁

意志と善意の人 ―自らの惨苦を見すえた不撓の作家― その4（最終回）

「梨の花」の色紙

―苦難の文字の自然破形美―

小林 亥一

数日色紙を眺めつづけていた私は、決意といえば大げさだが、「梨の花」の色紙を、上林先生にお目にかけることにした。天沼のお宅に着くと、睦子さんは笑顔で迎えて下され、先生もさっぱりとしたお顔をなさっていた。私は、恐る恐る色紙を取り出し、「こんな風にさせていただきましたが…」といってお見せした。先生は、最初、いぶかるようなお顔をなさった。しばらく御覧になっていたが、穏やかなお顔で軽くうなずかれ、何やらおっしゃった。私はホッとした。睦子さんもびっくりなさっていたが、うれしそうなお声で、文字に変った味わいがあっていいといわれた。そして、どうやって作ったのか、と質された。私は安心したからだっただろう、「作り方は明かされません。特許を取るつもりですから」などと、つい軽口をたたいたりしてしまった。色紙は、睦子さんが、先生の一番御覧になり易い場所に飾って下さった。

上林 暁

新潮社月刊の『波』の表紙は、毎号作家の筆跡で飾られている。昭和四十九年七月号は、「梨の花」の色紙だった。その発案者は、版画家の山高登さん。彼は当時、新潮社の社員（編集担当）で、関口銀杏子同様、上林文学に傾倒し、先生を敬慕されていた。天沼のお宅で「梨の花」の色紙を一見し、『波』の表紙にと思われたようである。話によれば、上林文学愛読者の中には、『波』の表紙を額に入れている人もある由、ありがたくうれしいことであった。

「梨の花」の色紙を熟愛なさった方で、童話作家の故与田準一さんを忘れることはできない。私が色紙を差し上げる事情については、睦子さんが、『ちくま』（昭和五十六年九月号）の「色紙と短冊」に書いていらっしゃる。

「梨の花」の色紙は、数年前、上林先生の御郷里、下田ノ口の小学校に飾られたし、平成十年に完成した大方あかつき館に展示されることになった。

こうしてペンを運んでいる机上には、上林先生のお写真が飾ってある。横臥なさっている先生の澄んだ御目は、「梨の花」の色紙の方に注がれている。（昭和五十一年四月二十九日撮影）

私は、写真の先生に、「お話」を始める。

先生、ことしの二月、御郷里に参りました。十六年ぶりでしたが、御生家の表門が新しくなっていましたことと、お母様がいらっしゃらないこと以外は、あまり変っていないように感じました。お家を守っておいでのお妹様が、お母様のような気がいたしました。おめでとう存じます。白亜の大方あかつき館が完成しましたね。展示室は少し手狭なように思いましたが、増設されるそうです。「梨の花」の色紙も飾ってありました。

先生は野に咲く花を特にお好きでしたが、それにしても、奥多摩から持参した梨の花を、あれほどまでによろこばれたのは、淡く霊妙な美しさからだけではなかったと想います。凋み切ってしまったと思われた花が、再び生き生きと咲き返ったからではありませんでしたか。私には奇跡的とさえ思われた、梨の花の蘇生を忘れることができません。「梨の花」の色紙を眺めるたびに、二十五年前のその日のことが蘇ってくるのです。雑然と誌されている当日の「天沼訪問記」を、述べてみることにいたします。

昭和四十八年四月二十二日（日）快晴

天沼の先生をお見舞いに、朝十時に家を出る。家の近くの畑に咲く梨の花を眺める。先生にお見せしたいと思う。畑の老婦に一枝もらえないかと頼んでみる。「何本でもどうぞ。」という。すぐに家に引き返し、新聞紙を用意。

奥多摩駅溝内の水道で枝々の切口を浸し、花に霧を吹く。枝を包んだ新聞の下部をよく濡らした。

大方あかつき館
〒789-1931 高知県幡多郡大方町入野6931-3 TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222

立川駅に着いて、新聞を開いてみると、梨の花は全部萎れてしまっていた。それらはちょうど細かくち切った純白の和紙が、二、三片ずつ濡れて重なっている感じだった。奥多摩駅と同様に水を含ませながら、東京行の電車を待つ。花が生き返るのを念じながら。少しかさばる枝の包みを頭上にかざし、車内の人の波に押されて阿佐谷駅に着く。午を大部回っていた。花は生き返っていなかった。別に向きになっていたわけでもなかったが、とうとう天沼のお宅まで持参してしまった。長く水に入れて置いたら、もしやという気がなかったわけではない。

睦子さんはお留守で、隣家の大熊夫人（先生の御長女）が出てこられ、上がってくれといわれる。枝の包みを差し出し、試しに水に入れてみて下さるようにお願いする。先生は午睡の後の御様子で、さわやかな目顔で迎えて下さる。おっしゃることも、初めのうちは大体分かった。「いい天気ですが、御気分いいでしょう」、という私に対して、軽くうなずき、微笑なさる。私は、注意して梨の花を持参したのに、萎れてしまって残念だと申し述べる。先生、こころもちお顔をゆがめ、「惜しい」といわれた。

先生は、『群像』五月号掲載の、Nという作家の作品を読んでくれとおっしゃる。文章を読んでくれといわれるのは、すぐ分るのである。伺うたびに読むことが多かったので、先生が本を開かれれば、音読するものだと思っていた。Nの作品は好きではなされたので、本を閉じた。その合図も一種のパントマイムで、私も心得たもの。「アッ、アッ」というお声に、私が顔を上げると、何とかおっしゃって、お顔を軽く左右に振り、左手で本を伏せる仕ぐさをなさるのである。お茶を運んでこられた大熊夫人、「梨の花、少ししゃんとしてきたようですよ」といわれる。先生小声でつぶやかれたが、まったく不明。梨の花が生き返りの兆しを見せたとはいっても、元にはもどるまいと思った。

それまで仰臥されていた先生は、私と向き合うように、体の向きを変えてくれとおっしゃる。枕上（まくらがみ）に回って肩を押えながら、左向きにしてあげる。先生が話かけられるのだが、何度お聞きしても皆目分らず、止むを得ずノートに書いていただくことになる。とはいっても、おいそれというわけにはいかない。まず枕もとの老眼鏡をかけて上げるのだが、曇りを拭かなければならない。睦子さんがよく拭かれていても、すぐ汚してしまわれるからだ。それから4Bをお渡しする。私は立って、広げたノートをもっとも書き易い位置に、しっかり固定するように支える。先生はゆっくりと書かれた。

“来月は本が出ますから“と読むことができた。「どこから出されるんですか」に答えられ、「講談社」、といわれたのはよく分かった。その御本が、第二十七創作集『ばあやん』だったことは、後で分かったが、”上げるから買わないように“、と書き添えられた。

先刻、先生のお体の向きを変えていたとき、大熊夫人が「どうも済みません」といわれて、私の後ろを通られたが、梨の枝を入れた花瓶を、床の間の台に置かれたのは、気配で分かっていた。

先生との筆談が一段落したとき、私は床の間の方へ目をやった。一瞬、目を疑った。こころもちほの暗い床の間に、いつの間に蘇ったのか、純白の花、花、花が、緑の葉に映えて輝きわたり、水際立っていたでは」ないか。「先生、梨の花が生き返りましたよ」といおうとしたとき、何かおっしゃった。私が持ってきていた文庫本を指さされ、「何を読んでいる？」、といわれたことはすぐに分かった。私が電車の中で読んでくる本を、目ざとく御覧になってお聞きになるのは、いつものことだったから。その日私は、ルイ・フィリップの短編集を読んでいた。久は本を手にされて、「いい」、とつぶやき、また何かいわれた。ノートに書かれたのは、

”ビュビュ・ド・モンパルナス“。

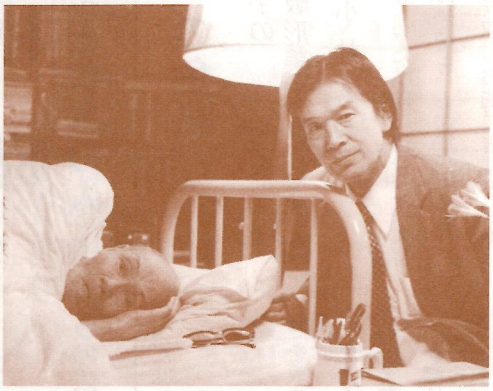
あまりお疲れにならないうちにおいとましようと思い、ノートを閉じた。そして、床の間の方を見た。梨の花達は、先刻より一段と冴え渡っているように思われた。叫びたい衝動を抑えて、「梨の花が、みごとに生き返りました。」といった。

先生は、ハッとなさったようだったが、御目を輝やかせ、早く見たいといわれたのが分かった。私はすぐにお体の向きを反対に、床の間の方へ変えて差し上げた。じっと観入っておいでで、何もおっしゃらなかった。私も黙って眺めていた。

純白の花達は、奥多摩の畑に咲いていたときよりも、生き生きと冴え返り、高貴に見えた。

四日後、次のようなお葉書を下さった。

なしの花がすがすがしい。「淡月梨花のうた」といふ佐とうはる夫の詩を思ひ出す。



上林暁と筆者（昭和51年4月）

＝上林暁「意思と善意の人」は、

今回で終了しました。＝

小林亥一先生には、長い間、ご執筆いただきまして、ありがとうございました。今後も上林暁文学館に、ご協力、ご指導をよろしくお願い致します。

大方町教育長　吉本 洋子

平成１３年度　大方あかつき館事業計画

1.上林暁文学館関係事業

- ●上林暁文学館協議会　４回
- ●企画展　１回
- ●大方の歴史を語る会　６回
- ●上林暁文学講座　４回

日　時		講　　師	演　題
第１回	８月５日13：30～	林　嗣夫（詩人・椋庵文学賞）	「上林暁を読む」
第２回	８月26日13：30～	杉本恒星（俳人・「壷」主催）	「創る楽しみ」
第３回	９月30日13：30～	植田　馨（上林暁 顕彰会会長）	「猿飼村の小松さん」
第４回	10月28日13：30～	佐々木正夫(作家･壷井栄文学館館長)	「上林暁と随筆」

場所：大方あかつき館　　受講料：無料

●大方の秋まつり　　平成１３年１１月１０日（土）～１１日（日）

★　第５回 上林暁忌短歌大会のお知らせ

日　時：平成13年　８月　19日（日）
（受付 12:00～　開会 13:00）
会　場：保健福祉センター　大ホール
主　催：上林暁顕彰会

2.　町立図書館事業計画

- ●図書館協議会　４回
- ●図書館だよりの発行　月１回
- ●紙芝居の制作
- ●催しもの

日　時	内　　容	場　所
平成13年9月予定	市原麟一郎講演会	大方あかつき館 レクチャーホール
平成13年9月	アジア大自然の学校・写真と詩展	大方あかつき館 町民ギャラリー
平成14年3月予定	人形劇「Manoj」	大方あかつき館 会議室
毎週日曜日 10：30～11：30	絵本の読み聞かせ 紙芝居、ビデオ上映など	図書館子ども室 レクチャーホール

1.生涯学習事業

(1) 青少年健全育成親子ふれあい事業（子どもの心育て事業）

計画月	行事名
7月～2月	ワールドクッキング
	史跡めぐり
	源流探検
	植物採集
	星座教室
	親子釣り大会
	国際コミュニケーション講座
	新春かきぞめ大会
	わんぱくスキー教室

(2) 大方町民大学ビッグ・カレッジ21（9月～11月）
(3) 女性講座（9月～1月）
(4) 家庭教育講座（10月～1月）
(5) IT講習会（5月～2月）

2.生涯スポーツ事業

計画月	行事名
7	子ども会ソフト・キック大会 県民スポーツフェスティバル・ソフトボール予選 ニュースポーツ教室 ユーユーペタンク大会 県民スポーツフェスティバル・ゲートボール予選
8	県民スポーツフェスティバル・野球予選 幡多地区子ども会スポーツ大会 市町村対抗球技大会
9	ニュースポーツ教室 県民スポーツフェスティバル
10	スポレクフェスタ大会
11	ニュースポーツ大会
12	大方少年駅伝大会 高知県体育指導委員研修会
1	大方町民マラソン大会
2	市町村対抗駅伝大会 あしずり駅伝大会 生涯スポーツ県民会議 バードランド周回駅伝大会
3	大方町スポーツ賞表彰式 大方町民駅伝大会兼四国の道駅伝大会 ジュニアバスケットボール大会

大方あかつき館
〒789-1931 高知県幡多郡大方町入野6931-3 TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222